

図書館たより

掛合町

「読み合い、語り合い、共に育つ」は、県立図書館が推進している子供読書活動普及のキャッチフレーズである。4月に開設した掛合町の図書センターでは、これをそのまま図書センターの読書活動普及テーマとして、活用させてもらっている。

本町がねらう「共に育つ」とは、網の目の読書環境を整えることによって、身近で本との接触が得られ、個人はもちろんのこと、家族ぐるみ、仲間とおし、地域ぐるみの共通の場において図書を提供する読書の生活化がねらいである。

そのための具体的方策のおもなものを列記して、新図書センターの紹介としたい。

①拠点としての図書センターの充実

図書センター設置場所は、町民体育館のロビーである。人の出入りが多く、利用者は増加している。現在の蔵書冊数は、県立図書館からの貸与冊数を含めて約8,000冊である。配本活動による貸出しをいっそう充実させるためには、在庫冊数充実が不可欠の条件である。年次計画により充実を図りたい。

②配本活動推進による読書環境のネットワークづくり。

現在、保育所、地区婦人会、子供読書グループ等の14か所を拠点にして約2,000冊を配本している。今年度から小・中学校への配本を開始し、その他への配本拠点開拓に力を入れ、網の目を張りめぐらせたい。

③ボランティア活動の促進

拠点に置かれている図書を利用にまで高めるためには、人の手による動機づけが必要である。読書活動の啓発・促進を図るボランティアの発掘に力を入れ、親子読書、子供読書活動を推進する人材のネットワークづくりを促進させたい。

生涯学習の機運がしたいに高まりつつある今日、住民の図書に対する期待もますます高まり、しかも

要求が高度化・専門化・多面化していくことが予想される。図書センターは生涯学習の情報センター、文化センターの役割をふまえながら、期待に応える使命を認識し、地域に密着した充実・発展を図っていききたい。
(掛合町教育委員会)

仁多町

昭和62年3月までは町中央公民館内に設置された図書室に3,169冊の蔵書を配置し、県立図書館の自動車巡回文庫の図書を定期的に300冊位を借入して貸出しを行っていました。本年6月1日より図書センターとして新発足し県立図書館から3,000冊の図書を借受け、合計6,169冊の図書で活動をはじめました。

昭和62年度より読書施設整備5か年、年次計画を立てました。本年度は施設整備計画として書架増設など備品を整備しました。図書整備計画では図書購入費30万円で一般用150冊、児童用150冊を購入する予定です。8月末現在、新刊図書204冊が入荷済みです。

◎読書普及活動計画

①配本所の設置…公民館4館1,700冊、小学校7校700冊、幼稚園5・保育所3…640冊を配本済み

②巡回活動…公民館単位で行う

③親子読書活動の実施…町内幼稚園、保育所

④読書グループの育成…婦人会、若妻会

⑤読書普及ボランティアの育成…退職教員に依頼

⑥町広報…公民館だより、により広報活動を行う

特に来館者とのふれあいを大切にするため窓口には女子職員を配置し、明るい図書センターとして努力したいと思っております。

(仁多町教育委員会)

新図書センター紹介



江津市立図書館

江津市江津町995
TEL 0875-7-0591

●江津市は島根県のほぼ中央に位置し、人口は2万8千人余り、面積158km²、財政規模は、一般会計で67億8千万円、特別会計で42億円です。

当館は昭和49年4月、市民の多年の要望の中で教育、文化の振興を目的する財団法人の一施設として開館しました。建物面積336m²、鉄骨2階建、職員4名、地区公民館との併設です。

2年半にわたる設立準備期間中、寄付も加わり7,800冊の蔵書からスタートを始め。昭和50年青年会議所文庫、昭和52年ロータリー文庫、昭和58年森脇文庫の開設と、年々資料も増加しました。

●利用者のニーズに答えるため次の点を心がけてきました。「市民の要求に応える資料の充実。」「多くの人が気軽に利用できる体制を作る。」その中で特に「貸出し」を中心に運営を行ってきました。

昭和62年度の蔵書冊数は3万5千冊、貸出冊数は5万冊となり利用者も年々増加し、閲覧室も狭くなり、もうこれ以上書架も置けない状態です。

昭和59、60年と図書館利用に関するアンケート調査を行いました。利用者が図書館をどのように見ているかどうかというイメージ調査又、図書館サービスについてどう思っているのか、図書館に何を望み、どんな点に不満をもっているのかを知るのがねらいでした。中学生以上の図書館利用者を対象としましたが、施設についての希望がかなりのパーセントを占めていました。

●開館当初から始めた移動図書館も14年目をむかえました。本来の移動図書館は専用の自動車を使って巡回するのですが、当館の移動図書館は、ライトバンに本を積んで遠方の小学校だけを対象に月1回直接貸出しを行っています。

移動図書館（於・有福温泉小学校）



●このほか、「あすなろ読書会」もずいぶん長く続いています。結成以来200冊を超す本を読み上げています。月1回の婦人層の例会で、同じ本を読み作品

の背景や、読後感想を話し合う。昭和56年には読書推進運動協議会から全国表彰を受けました。長年にわたり県立図書館の読書会用図書を借りていましたが、今では、浜田の西部読書普及センターの方で借りています。

●さらに、「古文書を読む会」は、毎月1回の例会、会員40名、14年続けてきており初回から数えると、170回に及んでいます。テキストは自館のもののみならず各所からの持ち込みの資料を使っています。多年にわたるテキストの解説書は、後の郷土関係資料の補助ツールとして役立っています。又、郷土関係に精通されている会員の方々に協力をいただき、情報提供していただきながら、不足資料、休眠資料の収集をしています。

●平行して、図書館歴史講座を主催しています。この講座は、「江津市誌を読む会」から発足したものです。昭和57年に江津市誌が完成しましたが、なかなか読む機会がありません。そこですこしでも市誌の内容、わたしたちの郷土を紹介して、理解していただくという主旨で始めました。中学生講座、一般講座を年各1回開催します。昨年は「江津の万葉」「斉藤茂吉先生と鴨山考」「近世石東地区の俳諧事情」でした。

このほか、「古典に親しむ会」は、月1回の例会、14年目をむかえます。古典文学に親しむため源氏物語から取り組みました。

●夏期教室として、子供読書会、図書館工作教室も年に数回行いました。親子読書については、現在5つの保育所で実施しています。資料費不足もあって、幼児用図書が不足するため西部読書普及センターよりまとめて図書を借用して不足を補っています。

●今日図書館としての活動が定着したとはいえ総合的には、サービス、運営管理、蔵書、いずれの面にも問題点がのこっています。図書館の利用要求が質量ともに高まっていくなかで、どのような対応をとっていくか、たとえば、①すでに蔵書収容能力の限界、②サービス網の谷間にある人たちへのサービス、③図書資料の確保、④一部層の貸出冊数の減少の究明、などの問題点が全職員の共通した認識になっています。しかし、このたびの市の総合振興計画に図書館整備計画が組み込まれたことはなによりも一歩前進といえます。

— 昭和62年度(前期)市町村読書普及研修会講演要旨 —
若竹に学ぶ子どもの発達

島根大学教育学部 上田 順一 教授

小学生を中心とした子供読書活動を進める上で、子供を理解するためにどういう点に着眼していくかを、若竹をみて学んだ事が多いので、若竹になぞらえて話をしたい。

○主体的な読書に導く

精選された良い本を子供に与えることはいい事である。子供がいずれはひとり読みをして、自分が選択するようにするのがいろいろな意味での教育である。初めはこちらから教材を与えたり、体験の仕方を指導して、出来るだけつまずきを少なくしたり、興味をもちやすくしてやる。最後は自分で見定めて選択をして自分の生活の状況なり、興味や関心のある所に従って読書活動を続けていく、これが自立した主体的な読書である。これは情報化社会で、これから子供がどうしても身につけていかなければならないことである。

○子供の心を開放してやる

子供に接する大人は、子供が感じた事、あれっと思った事を、何の心配も、恐れも、遠慮もなく素直に言ってくれるような人間関係をもつ事が大切である。本を読んで話し合う時、本を媒介にして子供が自らに問い掛ける、あるいは指導者に問い掛ける、そういう問い掛けが恐れなく素直に出来るようになってくれると、子供の心は限りなく広がって、健やかに伸びていく。

○成功の喜びをもたせる

竹の子は、何事にもこだわらずすくすくと伸びる。子供もこの様に伸びて欲しい。竹は雪が積ると曲るが、余程の事が無い限り折れない。太陽が出て雪が溶けると竹は元に戻る。この竹の粘り強さ、我慢強さも学びたい。

子供に我慢させることも大切だが、我慢をして頑張っって何かをやり遂げたという成功の経験をもたせないといけない。そうしないと、苦勞ばかりして中途半端で終わってしまったら、自分は何も出来ないと思ひ、出来ることも出来なくなってしまう。周囲の者が、励ましながらトンネルの先まで引っぱって「とうとう頑張っって出来たわね」とほめてやる。そうすれば、その回数だけその子の粘り強さが形成されていく。

竹というのは、1本1本生えているようだけど、地下茎が網の目のように手を広げ、手を握り合っている。人間は、家庭や学校で、人とのつき合いの生活をする。自己中心的に世の中を振り回していくこ

とは出来ない、人と競争することもあるけど、一方では団結心や、協同心がすばらしい力になる。これを地下茎に学びたい。

○小学生の心の発達に即して

小学生の時期は、大脳が目方が大人の90%あるいはそれ以上の大きさになっている。小学3~4年生は、児童期の中で一番元気があって、探求心があって、ものにのぼせやすい。そういう事があって扱う方からいうと目が離せない。独りぼっち的なのが低学年で、友達と遊ぶけれども浮気的で、朝は仲良く遊んでいても夕方はもうけんかをしている。3~4年生は友達を大事にします。これが子供にいろいろと悩みをつくる、先生にいつきたいけど、いつけると、友達の友情がこわれる。友達との係わりが非常に大事になってくる。1~2年生は何でも親にいたっていただけ、学校の様子が透けて見えなくなることが多々でてくる。5~6年生は子供の完成品というべきで、青春期に入り体から変わってくる。子供から青春期、成年へと動揺に満ちた時期に向かっていく。

講演会のもよう



○清純な心に響く子供読書会

小学生の時期は清純な気持が強い。親の善意とか、友達の友情というものが非常にきれいなかたちで子供の心に響いていく。そういう素晴らしい時期に、読書活動を通して、素晴らしい心の体験をするということは、願ったり、適ったりのいい時期である。

読書は、文字や事柄を字面だけ読むのではなく、その背後に流れている人間の姿をキャッチすることである。子供読書活動はそのキッチする心を育てる訳だから苦勞の多いことだと思うが、これは必ず子供の心に大きな宝を残していく活動になる。そうした受け皿が非常によく整っているのが小学生時期だといえる。この時期に、1冊でも多くの本に出会わせることは意義深い事である。

私共の読書会は発足してから足かけ9年になる。当初は社会教育主事であった現在の弥栄村教育長紀令持先生の御指導を頂いた。

集団読書は、会員それぞれ異なった生活、思想、考え方があり同じ本を読んでもその受け止め方や感じ方が違う。個人読書より2倍も3倍も受け止め方の領域が広がって物事を深く思考する生活態度を培っていくことができる。

先ず第1回目に取り上げた作品は、有吉佐和子「華岡青州の妻」であった。外科的処置に麻酔薬のなかった時代、麻酔薬を臨床にとその実験に取りこんでいる医師である1人の男性を母と妻の立場の2人の女性が内心互に反目しながら一命を落すかもしれない危険な生態実験に我が身を提供する様は、女の性の凄さと思っし、又それを充分知りながら巧みに2人の競争心を利用して悲願達成へと導いていった男のずるさが何となくぞっと寒く感じさせた。

私個人としては、女流作家の作品は古典や歌集以外余り読んでいなかったもので、始めは少々戸惑いを感じた。第1回目のテキスト以来有吉作品は、「恍惚の人」他6作品を宮尾登美子も同数位、曾野綾子は、「虚構の家」「汚れた神の手」「時の止まった赤ん坊」「贈られた眼の記録」などを読んだ。

男性作家のものでは水上勉作品が一番多い。「良寛」を読んで一番驚いた事は曹洞宗では被差別部落の人達に差別戒名をつけられていたこと。又それぞれの身分の違いに依る供養の方法、引導の渡し方など外部の人には判らない宗教行事の差別方法があった事などだ。同和問題が行政に於ても重視されてい



る今日我々も少し勉強しようと「シンポジウム差別の精神史序説」を読み、続いて藤村の「破戒」を取り上げた。何回読んでも丑松の苦悩を思うと涙がとまらない。

山下惣一「ひこばえの歌」も、私共農村地帯に生きる者には共感をよぶものであった。遺産相続問題では、百姓にとって土地が誰の名義であろうと関係ないことだ。自分の名義にしたところで死ぬ時背負って行けるものではない、売り食いする訳でもない。田畑はこの家に生れ耕し次々に生れくる皆のものであって誰のもでもない。土地は先祖からの預りもの、と云う考え方であって、農地が投機の対象と化しつつあることを嘆いておられるようだ。

私達の会は、余り堅苦しくならない様気楽に何でも話し合える会になるように心がけている。読後、鑑賞後の話し合いからしばしば脱線して、時事・社会・老人問題、漬物の漬け方から手造りジュースのつくり方と発展していくが却って親しみがまし得るものも多い。

次回の集いを楽しみに待っていて下さるようだ。経済成長率世界第1位、日本は今一番富んでいる国だそうだが我々には全く実感が無い。この読書会のみが、何となく豊かな気分にさせてくれる唯一のものだ。

本がなくては一日もいられない私達、今後もずっと続けていこうと話し合っている。

グループ名 弥栄村公民館読書会
会員数 12名
代表者 大野 暁江

NEWS

★昭和62年度市町村読書普及研修会の開催

東部は、8月10日県立図書館で、西部は、8月25日西部読書普及センターで開催された。両会場共80名あまりの参加者があった。

午前中は、島大の上田順一教授の講演があり、小学生の時期に健やかな心育てをするためにも子供読書をする事の大切さが語られた。午後は、実践事例発表と意見交換があった。参加者の多くが子供読書の指導員であり、熱のこもった体験談は、これからの子供読書活動の指導に大きな参考になるものだった。

なお、上田教授の講演要旨は、前ページに掲載したとおりです。

★読書体験記の募集

県読書推進運動協議会では、読書週間の行事の一環として読書活動の実践をとおした体験記を次の要領により、募集します。ふるってご応募ください。

1. 内容…親子読書、子供読書、成人読書、文庫活

動等の実践を通して思ったこと感じたことを書いてください。

2. 枚数… 400字詰め原稿用紙3～4枚以内。
3. 応募方法…住所、氏名、年齢、職業、性別を記入。
4. 表彰及び発表…10編程度を入选作品とし図書券を贈呈。発表は11月下旬頃です。
5. 締切…昭和62年10月31日。
6. 宛先…松江市内中原町52番地 県立図書館内 島根県読書推進運動協議会(TEL0852-22-5729)

★昭和62年度読書普及講演会の開催

恒例の講演会を次のとおり開催します。

1. 講師…鳥取大学教育学部 寓屋秀雄助教
2. 会場・日時
松江市…島根県立図書館
昭和62年10月29日(休)10:00～12:00
浜田市…島根県立図書館西部読書普及センター
昭和62年10月30日(休)10:00～12:00